

令和3年度 第2回学校運営協議会（記録）

1 日時 令和3年10月19日（火）9:00～11:20

2 参加者 学校運営協議会委員

- ・門池地区連合自治会長 様 ・沼津市手をつなぐ育成会顧問 様
- ・さんしんハートフル株式会社人材開発部主査 様 ・愛鷹分校 PTA 会長 様
- ・校長, 教頭, 高等部部事, 教務主任

3 校長挨拶

今回は、前期の取り組みの評価を受けて、後期に向けて取り組んでいく事を説明していく。また、分校の課題の一つに卒業後の生活があげられていることから、その点についても、併せて御意見を伺いたい。

4 学校自己評価中間評価の報告

- ・令和3年度学校経営書の資料に沿って、説明。併せて、第1回の協議会での課題について、報告。1つ目の課題の一般の方への啓発の第一歩として、県立沼津城高校との共生・共育や近隣中学校への教育相談などについて、取り組んだ。2つ目の課題の地域の捉え方について、防災に視点を当てて、取り組んだ。学校で学んだことを、居住地で地域の防災訓練などに参加し、地域の方に分かってもらえるように、指導していきたい。

◎学校運営協議会について

（委員より）

- ・後期に向けて、コミュニティースクールをどのように捉えて、取り組んでいくのかが大事になる。
- ・モデル地区があるが、上手くいってないのが現状である。学校運営協議会を行うにあたって、目標を掲げていくと良い。

（校長より）

- ・特別支援学校は小中学校に比べ学区が広いので、地域をどのように設定していくのかが大切になってくる。地域の設定と共に、協議会で何をテーマに話を進めていくのが分校にとって良いのか、再度検討していきたい。

◎知的障害者を知ってもらうことについて

（委員より）

- ・日常的に障害者と関われる日本であってほしい。
- ・障害者への理解について、ダイバシティーに取り組むようにしていきたい。障害に対する理解を深めるには、接する機会を多く持たないといけない。その機会を、どのように続けていくのか、続けて発信していく難しさを感じる。発信の1つの方法として、支店での美術作品の展示など、会社としてできることは、協力していきたい。
- ・本校にいる知的障害の重い生徒は、「自分に障害がある」という意識がないと思う。しかし、愛鷹分校にいる軽度知的障害の生徒は、「普通校の生徒と対等になれる自分がいる。」と思っているから、生活するにあたり、難しい面が出てくる。
- ・多様性をどのように受けとけるのかが大切である。
- ・地域に愛鷹分校があることで、地域の行事に参加したり、清掃や福祉活動に来てくれたりして、地域の方に、知的障害者について、知ってもらう機会がある。
- ・学校のホームページに、内部や外部のリンクを入れると、閲覧履歴が上がる。
- ・軽度知的障害を持つ生徒への理解や知的障害について理解する場が少ない。保護者は、普通校に入れたいから、支援学級に入れたという人もいて、障害に対する理解に壁がある。

(校長より)

- 共生社会を実現していくために、特別支援学校では小学部の時から、居住地校での交流を行っている。愛鷹分校も、沼津城北高校と自然な関係で交流活動できるように考えていた。しかし、今は、新型コロナウイルス感染症が流行し、思うように交流ができなくなってしまっている。
- 愛鷹分校は地域で学ぶことで、地域の方に知ってもらう機会があり、ありがたい。
- 入学したとき、自己肯定感が持てない生徒が多い。教師は、あなたは大切な存在で価値のある人、大切な人であると生徒たちに伝えていく。生徒が、自信を持って生活できるように指導、支援していきたい。
- 分校に来てもらうだけでなく、分校職員が中学校に足を運び、連携を深めていく必要があると考えている。

◎ICT教育について

(委員より)

- アフターコロナで、リモートやオンラインでのコミュニケーション方法がある。学校評価中間評価で、評価が芳しくない。ICTの活用に力を入れる必要がある。ICTを活用して、授業ができるように、先生方に学んでほしい。

(校長より)

- ICTの活用について、遅れている面もある。今後、ICT活用ができるように、積極的に取り組んでいきたい。

◎卒業後を見据えた教育活動について

(教頭より)

- 卒業生の状況について、説明。

(委員より)

- 卒業後、グループホームで生活をする方が、困ったことがあった場合、その時必要な関係機関とつなげている。
- どのようなしくみで支援できるのか。ケア会議、民生児童委員、個別案件を、専門家が集まって支援していくのか。最後まで支援するしくみがあればいい。
- 離職してしまった場合、保護者からだと、学校に連絡していいのか、躊躇してしまう。この場合は学校、この場合は役所と連絡を取るなど、保護者から声をあげられるように促す。
- 子どもは、1年生の時から、支援機関について知る機会を持つ。普段の学習の中で、困ったことが言えるように、また、困ったときには、相談する場所はここというように、子ども自身が、できるように指導して欲しい。

(校長より)

- 本人や家庭が頑張るだけでは、限界がある。早い段階で、関係機関とつながり、体制作りをする必要がある。
- 分校では「職業」の授業について、3年間の学習をどのように積み上げていけばよいかの研修が始まった。県内の高等部分校と連絡を取り合い「職業」の学習内容について検討している。卒業後に豊かな生活が送れるよう、一人一人に合った指導をしていきたいと考えている。

5 授業参観

- 3年生の総合的な探求の時間「壁画づくり」を参観。